



マーシャルのごみ事例を 未来を考えるきっかけに

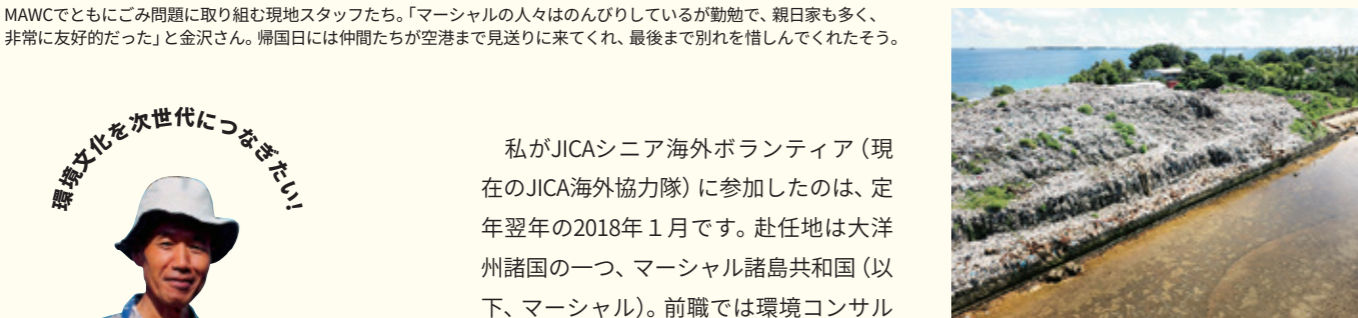
金沢正文 元JICAシニア海外ボランティア

世界各地、多様な職種で活動する
海外協力隊員の活動をご紹介！

構成／倉石綾子



MAWCでともにごみ問題に取り組む現地スタッフたち。「マーシャルの人々のはんびりしているが勤勉で、親日家も多く、非常に友好的だった」と金沢さん。帰国日には仲間たちが空港まで見送りに来てくれ、最後まで別れを惜しんでくれたそう。



が高まっています。MAWCは、この国が抱える廃棄物という大きな課題への対策に取り組んでいるのです。

マーシャルは平均標高が2メートル弱しかないため、気候変動による海面上昇への危機感を国民全員が共有しています。そのため環境問題への取り組みに関し



「飲料容器デポジット制度」の様子。住民が町中の空き缶を回収、袋いっぱいにして回収場に行列する(左)。集まった缶は圧縮機でブロック状にし、海外へ有償売却。MAWCの資金源となり、今後の事業継続につながっている。



金沢さんのもう一つの取り組みに、コンポスト事業の立ち上げがある。マーシャルはサンゴ礁の島のため、コーラルサンドが地面を覆い、いわゆる「土」がない。そのため、農作物を栽培する土作りにごみ堆肥が有効活用でき、商品としての流通も期待されている。

「環境文化フォーラム」ではマーシャルのごみ処理事例を入口に、環境問題を考えるきっかけづくりを行っている。



では、日本より推進されているものも多く、例えば、使い捨てプラスチック食品容器の使用禁止、3R(リデュース、リユース、リサイクル)の推進、環境教育、空き缶やペットボトルを持参した人に5セントを返す「飲料容器デポジット制度」などが積極的に推し進められています。

派遣中、私は「飲料容器デポジット制度」の立ち上げに取り組んだのですが、持ち込んだ容器が現金に変わるということもあって、住民が積極的に参加してくれました。その結果、街から空き容器が一掃されたのです！ マーシャルの歴史が変

わった瞬間だと、大いに感動しました。現在は、地元の滋賀県草津市でNPO「環境文化フォーラム」に参加、活動を続けています。マーシャルでの経験を生かしてごみ問題を日本でも広く訴えていこうと、講演活動を行っているほか、将来的には環境教育の一環として海外と日本の学校のオンライン交流も企画中です。

シニア海外ボランティアを通じて実感したのは、私たちは「バトン走者」であるということ。培ってきた知識や経験を伝えて、後継者を育てる。それが私たち世代の役目だと思っています。

SMALL TALK

日本語由来の言葉も！ マーシャル語事情

「Iokwe!(ヤッコエ)！」これはマーシャル語の挨拶で、「私とあなたの間を虹の架け橋でつなぎましょう」、つまり「こんにちは」の意です。マーシャル語にはもともと文字がなかったため、表記にはアルファベットが使われています。第一次世界大戦から第二次大戦終結まで日本が統治していたこともあり、「スシ(寿司)」「ジョーリ(草履)」といった日本語由来の言葉が見受けられるほか、「モモタロウ」という姓を持つファミリーもいます。モモタロウ一家は大臣も輩出している名家なのですが、マーシャルと日本の深いつながりを感じさせられました。



海外協力隊員になろう！



JICAでは、海外協力隊(長期派遣)2021年春募集を実施しています。詳細は左のQRコードから公式サイトからご確認ください。

環境文化を次世代につなごう！



かなざわ・まさふみ

出身地：滋賀県 職種：廃棄物管理
任期：2018年1月～2020年3月